

日本 戦闘者



荒谷卓（あらかたかし）
 生年月日：昭和34年秋田県出身
 略歴：昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
 海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの“異端”自衛官一人は何のために戦うのか！—』ワニプラス
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
 代表：荒谷卓



前回に続いて、日本の戦闘者としての資質について話をする。今回は「適応力」についてだ。グリーンベレー留学時は、この「適応力= adaptability」がとても強調されていたのが印象に残っている。通常戦部隊の戦力は、「量」が決定的に重要であり戦力を集中し「量で敵を圧倒する」ことが求められる。例えば、攻撃行動をとるためには敵の戦力の6倍（最低でも3倍）が目安になる。したがって、兵士には自ら考えることを禁止し命令に絶対服従を強要して、戦力を集中できる戦術体型をとり部隊を運用する。これはスパルタ以来の伝統的なファランクスと呼ばれる作戦戦術思想だ。これに対して、非通常戦を遂行する特殊部隊は、少人数で大きな戦力と戦う。したがって、戦力の重要な要素は「量」ではなく「質」となる。映画の世界では、戦力の質という高性能兵器や超人的能力を持つ人間が出てくるが、実際にはそんなものではない。俺が言うところの戦闘者としての資質がまさに戦力の「質」であり、その一つが「適応力」なんだ。一般兵士と特殊作戦戦士の決定的違いがここにある。

一般兵士は、自ら思考することをせずにマニュアル通りに動き命令に絶対服従するように訓練される。いわゆるGIジョーだ。米海兵隊などは、自ら特殊部隊だと言っているが、まさにGIジョーの塊で米特殊部隊とはメチャクチャ相性が悪い。特殊部隊の兵士は自らを「オペレーター」と称して、非マニュアル的行動と主体的思考で作戦を遂行する。だから、命令の出し方も、細かいことは指示せず、最終的に成し遂げるべき成果（エンド・ステート）とその目的だけを示す。その成果を創出するために、自分が何をなせばいいのかはオペレーター自身が考え、ユニットとして整合をとる。

では、「適応力」とは、どんな要素で構成されるのかというと、「自らの使命の自覚」「情勢・状況の正確な把握」「自らの行為が及ぼす影響の洞察」「スタートからエンド・ステート迄のプロセスのイメージ化」「躊躇ない行動と行動計画の適時修正」等だ。

「自らの使命の自覚」は、常に最重要要素だ。これがなくては「適応力」が成立しない。つまり、適応するとは主体的行為であって従属することではない。主体性を失って情勢や状況に合わせる行為は、その潮流に飲み込まれたのであって従属的行為となる。敵情収集の

ため敵に潜入して、敵の仲間になり、そのまま敵の一員になってしまうようなものだ。常に「自らの使命の自覚」を最優先に考えるということが「適応力」の絶対条件となる。

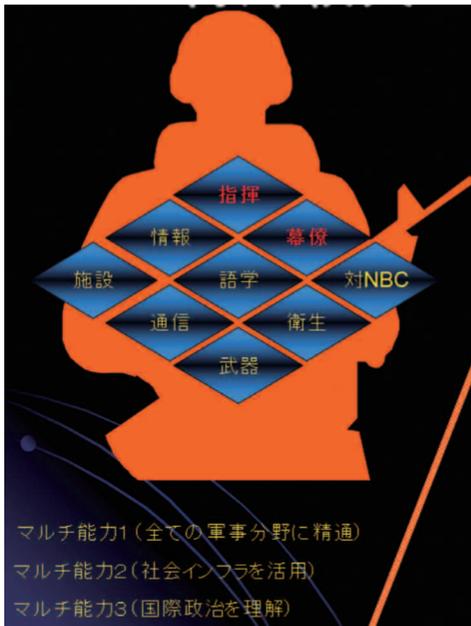
「情勢・状況の正確な把握」は、適応する対象の正確な理解である。特に、敵や自分の忌み嫌うものに対しても客観性をもって把握することが必要だ。詳しいことは、情報について述べた記事に記載しているので、ここでは省略する。

「自らの行為が及ぼす影響の洞察」とは、何をすると何がどのように変化するかを予測するのである。敵の警備態勢を監視するだけではなく、特定の情報を敵に与えるとどのような反応をするのか、どんな仕事・服装・話し方をすれば敵とコンタクトできるか、敵の誰と仲良く成れば望ましい変化が期待できるか等々、自分が主導的に敵に働きかけることで望ましい敵の変化を創造するために、あらゆることを考えてみる。「スタートからエンド・ステートまでのプロセスのイメージ化」とは、いわゆる「風が吹けば桶屋が儲かる」話のようなものだ。因果関係はいろんなところで繋がっているのだから、一つの行為や変化が玉突きで思わぬところに影響を及ぼす。そうした因果関係を読み解き、映画のストーリーのように頭の中で具体化する。

「躊躇ない行動と行動計画の適時修正」とは、上記のような突拍子もない思い付きは頭で考えるには楽しいが、いざ実行するにはかなりの胸が要る。そこを何の躊躇もなく「おし、やろう！」と決断し実行してみる。当たり前だが、相手がいる以上、何事も思ったようには物事が運ばない。そうすると予想とは違う状況が生じるわけだが、そこで立ち止まってグダグダ考えてもしょうがない。その時はその状況に合わせて、すぐに計画を変更し別の手を考え実行する。つまり、思考と行為を常に同時に、かつ柔軟に働かせ、ひたすらエンド・ステートの達成に向かっていくわけだ。

だから、「適応力」を発揚するためにやってはいけないことは、信念薄弱、思い込み、従属思考、教条主義、マニュアル的発想と行為、計画遵守、悲観主義、自信喪失等だ。

一般的に米国人は、強引で自己主張が強く、周りに自分を合わせると言うよりは周りが自分に合わせると言う感じだから、この「適応力」が特に強調されているように思う。それに比べると日本人は、この「適応力」は優れていると思うよ。周りの人に合わせるのは得意で、社会や環境が大きく変わっても、うまいこと対応できてきた。明治以降の西欧近代化もそうだし、戦後の高度経済成長もそうだし、ここでの「適応力」というのは小賢い要領のよさや人の顔色を伺ってコロコロ態度を変える様なものじゃあないよ。文明開化だグローバル化だ等とはしゃいで、日本人としての尊厳を失ってまでも目新しいものや自分にとって都合のいいものへ心を変える節操のない馬鹿者は、時代に適応したのではなく時代に飲み込まれただけだ。「日本のために日米同盟が必要だ」なんて言ってる奴らは、結局、米国に追随することが目的化している。こいつらには、日本人としての明確な信念がなく、強いものや風潮に迎合することにより自己実現を目指す事大主義者にすぎない。俺が、ここで言うところの「適応力」とは、あくまで目的を達成するための手段として、柔軟に状況に適応できる能力のことだ。



まかしながら、最後は念願の吉良上野介を討ち取るんだ。この話は赤穂浪士の「適応力」の精華だ。最近、『忠臣蔵』が映画でもテレビでも放映されなくなり、拳銃の果てにはネット検索で調べても、日本人の美談だったはずの『忠臣蔵』が正反対の内容にすり替えられてしまった。おおかた、グローバル化による国民の締め付けや監視統制を強化することになってきたので、国民が、赤穂浪士に感化されて正義を正そうと行動されてはまずいということだろう。前にも話をしたが、小野田寛朗さんが福島県の塙町に「小野田自然塾」を開設する際、泊りがけで施設整備を手伝っていた。その折に、小野田さんから毎晩伺ったルバング島での行動は、まさに抜群の「適応力」そのものだった。29年にわたり任務遂行に身を投じ、たった一人になっても日本軍人小野田健在を示すための作戦行動を止めず、衣食住の工夫はすべて現地に在るものだけで賄い、日本の大義を貫いたんだ。かっこいいよな。その時、小野田さんから頂いた、「不撓不屈」の色紙は、今でも机の前に掛けてある。この言葉そのものは、「胆力」を顕すが、それを裏付けたのは「適応力」だった。小野田さんは、その「適応力」を小野田自然塾のサバイバル教室で子供たちに伝えようとしていたよ。

もっと大きな話で言えば、人類のこれまでの歴史は人類全体としての環境への「適応力」によるものだ。優生学信奉者が作り上げたダーウィンの進化論のような弱肉強食競争の勝者や、突



邸を監視していた。赤穂藩志士の実力行動を警戒していた幕府を欺くため、大石内蔵助をはじめ浪士皆がこのように身をやつてまで淡々とチャンスを狙っていた。そして、幕府はもとより周りの人達の目をもご

然変異の優れた人間が人類の進化をリードしてきたなどという歴史は嘘っぱちだよ。今じゃ、そいつらが人工的にエリートを創りだし、人類の歴史を破綻させようとしている。しかし、宇宙や地球の摂理に反するような人工的社会は、結局滅びるんだよ。

地球に調和できない生き物は絶滅し、地球との調和を取ることに工夫を凝らす生命体は地球環境に適応し進化する。それだけだ。

人間が未永く生きていくため（今どきで言えば持続的成長）、住む土地の自然と調和する「適応力」、それが日本の文化伝統の力だ。だから、日本の戦闘者に必要な「適応力」とは、日本人として、日本肇国以来の民族の念願「自然と一体となった一つの家のような六合（くに）の創造」に向けて、この腐敗しきったグローバル資本主義社会を正して、世界の手本となるような良い社会、よい日本創りに力を尽くすことだ。



小野田寛朗さんから頂いた「不撓不屈」の色紙。